

りんごの黒星病が多い

～ 耕種的防除と薬剤散布を徹底してください～

1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

6月中旬のふじの巡回調査における全県の黒星病の発病果そう率は1.8%（平年1.2%）、発病地点率は15.0%（平年11.4%）でいずれもやや高かった（表-1）。発病果率は0.3%（平年0.1%）で高く、発病地点率は10.0%（平年6.1%）でやや高かった（表-2）。また、これまでの調査で発病が確認されなかった県中央部・県南部の園地で発病が確認されている。

6月22日に仙台管区気象台から発表された1か月予報によると、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている。

以上のことから、今後、黒星病によるりんごの葉と果実の発病が拡大すると予想されるため、園地内の発生状況を確認し、以下に示す耕種的防除と薬剤防除を徹底する必要がある。

表-1 6月中旬の巡回調査における発病果そう率と発病地点率(%)

	県北部		県中央部・県南部		全県	
	発病果そう率	発病地点率	発病果そう率	発病地点率	発病果そう率	発病地点率
2023	4.6	14.3	0.3	15.4	1.8	15.0
平年	3.2	31.3	0	0	1.2	11.4
概評	並	少	—	—	やや多	やや多

表-2 6月中旬の巡回調査における発病果率と発病地点率(%)

	県北部		県中央部・県南部		全県	
	発病果率	発病地点率	発病果率	発病地点率	発病果率	発病地点率
2023	0.6	14.3	0.1	7.7	0.3	10.0
平年	0.1	16.7	0	0	0.1	6.1
概評	多	並	—	—	多	やや多

2. 防除対策

1) 耕種的防除

- ・園地内の見回りを行い、発病葉（図-1）、発病果実（図-2）は見つけ次第摘み取り、焼却する。また、発病がこれまで確認されていない園地でも見回りを十分に行う。

2) 薬剤による防除

- ・表-3に示す防除薬剤を参考にして、薬剤散布を行う。
- ・薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を10～12日程度に短縮する。
- ・黒星病の発生園では、QoI剤（RACコード：11）の使用を中止し、保護殺菌剤（ベルクート水和剤、オーソサイド水和剤80等）（同：M7、M4）を10日間隔で散布する。
- ・黒星病の未発生園では、QoI剤を使用できるが、必ず作用機作の異なる保護殺菌剤を加用する。また、QoI剤耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用を厳守する。
- ・早生品種に散布する場合、パスポート顆粒水和剤の使用時期は収穫45日前までなので、注意する。

表-3 りんごの黒星病の防除薬剤

RACコード	薬剤名	希釈倍数	使用回数	各成分の使用回数	散布時期
M5	バスポート顆粒水和剤	1000倍	3回以内	ア	6月中旬～7月中旬
M4	オーソサイド水和剤80	800倍	6回以内	イ	開花直前～収穫前日
M4・P7	アリエッティC水和剤		3回以内	イウ	
M7・M4	ダイパワー水和剤	1000倍	6回以内*	イエ	6月中旬～収穫前日
M7	ベフラン液剤25	1500倍	6回以内*	エ	7月中旬～収穫前日
M7	ベルコート水和剤	2000倍		エ	
11・7	ナリアWDG	2000倍	3回以内	オカ	6月中旬～収穫前日
11	フリントフロアブル25		4回以内	4回以内	
11	ストロビードライフロアブル		3回以内	3回以内	

RACコード

7:SDHI剤 11:QoI剤 M4:フタルイミド剤 M5:クロロニトリル剤 M7:ピスグアニジン剤 P7:ホスホナート剤

使用回数

*:6回以内(但し、開花期以降散布は3回以内)

各成分の使用回数

ア:TPN(3回以内) イ:キャプタン(6回以内) ウ:ホセチル(3回以内)

エ:イミノクタジン(8回以内(液剤及び水和剤は合計6回以内(開花期以降は3回以内)、塗布剤は2回以内))

オ:ピラクロストロビン(3回以内) カ:ボスカリド(3回以内)



図-1 黒星病の発病葉(ふじ)



図-2 黒星病の発病果(ふじ)

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660

秋田県果樹試験場 TEL 0182-25-4224

かづの果樹センター TEL 0186-25-3231

掲載HP <https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>